

式辞（平成22年度）

平成22年度卒業記念式典にあたりお祝いの言葉を申し述べます。卒業生の皆さん、おめでとうございます。皆さんのなかには、2カ月前に巣立ってゆかれたこの母校に、卒業後初めて来られた方も少なくないと思われる。最も感受性が鋭敏で受容力の強い時期を、社会の喧騒から一步引いた、ここ、皇居と神田古本屋街の中間に位置する神田一ツ橋キャンパスで、学問や友情に包まれて過ごしたことの幸福や有利さには計り知れないものがあります。このことを可能にくださったご父母をはじめとするご家族の方々に、本学は皆さんと一緒に感謝を捧げたいと思います。

さて、この卒業式を、予定していた3月15日に行えなかったことについては、すでにじゅうぶんご理解をいただいているものと存じます。東日本大震災が日本中に与えた衝撃の余震はいまだ少しも弱まることなく続いておりますが、そのなかで卒業記念式典を行うのは、卒業式を行わないままではいつまでたっても気持ちに区切りがつかないということと同時に、犠牲になられた方々のご冥福を共に祈り、かつまた我が国の復興に向けてお互いの決意を確認しあう場を設けたいとの願いからであります。気遅れや逃げ腰であっては、国の再建という大事業に立ち向かうことはできません。いま我々に求められているのは、闘う姿勢であります。闘うことこそ、亡くなられた方々へのご供養にほかなりません。伝説の火の鳥が、自らを焼いた灰の中から蘇るように、日本はこの心の廃墟のなかから蘇らなければならないのであります。

平成22年度卒業生の皆さんも、すでに社会人としての苦労を経験しておられることと思います。期待通りの満ち足りた生活を送っている方もおられるでしょうが、むしろ、そうではない、こんなはずではなかったとの思いのなかで日々を過ごしておられる方の方が多いのではないのでしょうか。特にこの社会の混乱期のなかで新社会人となられた皆さんには、その思いがひときわ強いことと察せられます。社会の混乱期には、政治や経済が揺らいでいるばかりでなく、価値観も揺らいでいます。社会はこのままでいいのか、という思いを多くの人が抱いています。それは、若者の活躍の場が広がっているということでもあります。動揺を助長するのではなく、高次元の安定に向けて力を発揮していただきたいと思えます。どんな混乱や不幸に対しても、その後の努力によって積極的な意義づけを与えることができます。じゅうぶんな努力をするだけの時間と活力のある若い人々の活躍に期待するゆえんであります。

しかし、努力というものは、決して派手な、人目につくものではありません。日々の日課のなかで、どれだけのものを積み上げられるか、にすべてがかかっています。日課には、個人の意志に関わりなく外的条件によって決められる要素が多いことも事実ですが、そのなかで、自分と社会のために、どれだけのものを貯えてゆけるかが問題となります。自分はこの社会とどう関わろうとしているのか、そのためにはいま、どのような準備をしておくべきか、を常に考えていなければなりません。そのためにも、自分で納得のゆく習慣を作り上げることが重要です。シェイクスピアの晩年に、「日課を失えばすべてを失う」という言葉があります。よい日課の確立と維持は、人生のすべてだと言っても過言ではありません。そして、そのことを通じて、一人一人が社会の発展に貢献することになります。

人間と動物の大きな違いの一つは、人間は歴史を生きている、ということです。人間は、よくも悪くも、歴史をひきずり、過去からの時間の流れのなかで生きています。今回の大震災は、これから皆さんの生涯を通じて、語り継がれ、教訓としての意味を持ち続けるでしょう。

同時に、時間は、過去から未来に向かって流れるのではなく、未来から過去に向かって流れるのだ、という考え方もあります。すべてのものは時間によって過去に押し流され、日々、遠のいてゆく、というわけであります。しかしながら、時間という波は、どちらに向かって流れるにせよ、ともすれば、人間の存在そのものを押し流してしまう強さを持っています。都合よく、忘れたいものだけを洗い流してくれるというわけにはいきません。私たちは、時の流れに押し流されないだけの強さを持たなければなりません。過去がどうであれ、結局、いつも現在から出発しなければならぬ理屈は同じです。皆さんが、個人として過去と責任ある関わりを保ちながら、しかも、日々、不死鳥のように蘇られることを切望します。

終りに、ご列席のご家族の方々に祝いと御礼を申し上げ、卒業生の皆さんの今後のご健康とご活躍を祈念し、式辞

といたします。

平成23年5月29日

共立女子大学
共立女子短期大学
学長 入江和生